

ワトソンとナイチンゲールの看護観における詩と死生観に関する考察

井村俊義¹⁾

【要 旨】 フローレンス・ナイチンゲールが看護を概念化した19世紀の英国は、産業革命を終えつつあったとはいえ、いまだキリスト教の影響下にあった。キリスト教と看護の関係性については、フリードリッヒ・ニーチェがのちに『反キリスト者』で批判した「人々を馴致する要素」があり、また、シオバン・ネルソンが指摘した「やがて道徳的なものへと移行するもの」という要素も含まれていた。しかし、ナイチンゲールが『看護覚え書』のなかですでに示唆していたように、看護が念頭におくべきもっとも重要な概念は「神＝自然」というアニミズム的な発想であった。ポストモダン看護を提唱するジーン・ワトソンもまた、ナイチンゲールのそのような側面を継承して看護論を構築しようとしている。その際に、ナイチンゲールとワトソンが言及した「詩」という表現方法を活用することによって、近代社会および近代看護が失ってしまったもの、とりわけ「死生観」を取り戻すことの可能性について論じた。

【キーワード】 ワトソン、ナイチンゲール、プレモダン、ポストモダン、キリスト教

1. はじめに

18世紀の「実験医学」から19世紀の「科学技術の世紀」を経て、医学は近代医療を活用することで大きな成果を上げてきた。19世紀を生きたフローレンス・ナイチンゲールもまた近代医療の隆盛に合わせ、『看護覚え書』などの著作を通して近代医学に付置できる形として「近代看護」を概念化した。一方で、彼女が残した膨大な著作やメモから明らかなように、キリスト教を核としたプレモダン（前近代）な精神が揺籃期の看護に色濃く影響を与えていたことはよく知られている。結果的には、プレモダンな背景は医療現場の表舞台から去り、近代医療に組み込まれた側の看護は今日までアーキタイプとして重視され、ナイチンゲール

自身も「近代看護の祖」と位置づけられた。

とはいえ、彼女の看護への情熱を支えた宗教的な動機が完全に捨て去られたわけではないことは、『看護覚え書』の序文や補章などからもうかがい知ることができる。補章の冒頭に書かれた「看護の詩 (the poetry of nursing)」という比喩は、近代的合理性のアンチテーゼを象徴する言葉として使われたことは、ナイチンゲール自身が示唆しているとおりでである。つまり、近代医療に即した形での看護の概念化は、いまだ宗教が支配していた時代から見ると「散文的で、単調で、退屈な」(prosaic) ものと受けとめられることを彼女は危惧していたのである。

それから約150年を経た21世紀を生きる私たちはいまだ、看護の根底に流れているこの重要な対比を比較

¹⁾長野県看護大学
2021年9月23日受付
2022年3月17日受理

考量しようとしてはいないのではないだろうか。おそらく、後者の散文的で近代的な発想に慣らされてしまった私たちには、前者のプレモダンな思想はもはや実感として理解できていない可能性がある。ジーン・ワトソンによる問題提起の根底には、この二項対立の解消があると私は考えている。

近代科学で重視される「定義」や「数値」とは無縁の「(看護の)詩」が近代から抜け落ちてしまったように、人々の生きる意味を長きにわたって規定してきた「死生観」もまた軌を一にして失われていった。個々人の「主体」を重視する近代社会では、人は「何のために生き何のために死ぬのか」という問いを軽視し、「自分のために生き、一秒でも長くこの世にいたい」とばかり願うからである。自由な意志を持つ者として自分を「神」の位置に置いた近代人は、自分の「生き死に」さえをも「合理的に」捉えようとし、死生観を非合理で無用のものと見るようになった。その結果、死生観を必要としないまま人生を送ることができると考える人々が大半になったのである。人間は自然のなかから生まれ自然に生かされ自然に還るという当たり前な事実を置き去りにしたまま、抛るべきものを模索しつつ不安定なまま生きているというわけである。

2. 看護におけるキリスト教の位置づけ

ここにおいて看護は、矛盾のなかを歩くことを強いられることになった。なぜなら、看護は医学の歴史よりもさらに、人間の霊的な部分を担って生まれた経緯を持つからである。近代思想と相反する宗教的な死生観が欧米の看護にいまでも伏流し続けていることは、GHQが日本の看護をキリスト教の布教とセットで輸出した歴史からも類推できる。看護歴史家のシオバン・ネルソンは、19世紀における修道女と看護師の関係について以下のように記している。

病人の世話は、技術を必要とする実践であり、伝道の機会でもあった。つまり、看護を行う修道女には、プラグマティックで世俗的な使命感と同時に、完全に宗教的な動機の一つが混在していたのである。宗教に基づく看護という混淆した生活様式だったからこそ、彼女たちは世俗と宗教のあいだの境界線を越えること

ができたのだった (Nelson, 2001, p.151)

現に、1854年にスクタリへと赴いた38人の女性の内訳は14人の看護師と24人の修道女だった。「看護する精神」や「看護する使命」が宗教に裏打ちされていたからこそ世俗と信仰の垣根を越え、看護師は過酷な運命に身をさらす覚悟を持つことができた。医師が放棄した厳しい労働環境を看護師がやりがいのある仕事と捉えた心理は、人が他者のために生きることを可能にしたキリスト教が寄与していると考えられる。

同様のことを、19世紀後半のドイツの哲学者、フリードリッヒ・ニーチェは「道徳的世界秩序」という用語を使って、人々がキリスト教に縛られていると捉えて説明を行っていた。『反キリスト者』に次のような指摘がある。

神の意志が、人間のなすべきこと、なしてはならないことが断じてあるということ、民族の、個々人の価値が、神の意志に服従する多少に応じて測られるということ、民族の、個々人の運命のうちで神の意志が、支配するものとして、言いかえれば、服従の程度に応じて罰し報いるものとして、自らを証示している (ニーチェ, 1994, 200頁)。

「服従の程度に応じて罰し報いる」という精神構造を利用して、人々は割に合わない作業を押しつけられる。ニーチェはこの一節のすぐあとで「すべての健康に形成された生を食いつぶすことによるのみ栄える一種の寄食的人間、僧侶は、神の名を誤用する」と断じている。神の名を利用してつらい仕事を納得させるシステムが存在するという点において、ジーン・ワトソンがキリスト教的精神だけではなく、東洋の神々を念頭においていることは興味深い。東洋思想を看護といかに結びつけていくかはワトソンの関心事の中心にあった。東洋思想に関しては、ニーチェは同書のなかで仏教についても言及している。

仏教は、老成の人間たちにとっての、苦悩をあまりにもやすやすと感受するところの、善良な、温和な、きわめて精神化されてしまった種族にとっての宗教で

ある（ヨーロッパはまだまだ仏教を受け入れるまでに成熟してはいない）。（中略）キリスト教は猛獣を支配しようとするが、その手段は、それを病弱ならしめることである。弱体化せしめるというのが、馴致のための、「文明化」のためのキリスト教的処方である（ニーチェ、1994、192頁）。

「弱体化」せしめられ「馴致」された人々は「文明化」の名のもとに自らを縛りつけるとしても、やはり修道女は厳格な規律を守る者として尊敬され、看護師はその恩恵を受けることになった。ネルソンは先ほどの文章に続けて次のように書いている。

19世紀初頭、看護は修道女が行っていたという理由だけで、尊敬される職業だった。だから、英国国教会やディーコネスのような修道女と似た立場の女性も、社会的地位を失うことなくこの仕事に従事することができた。ナイチンゲールの功績は、「道徳的な仕事としての看護」という形式を、信仰や教派に関係のない女性にまで拡大する道を開いたことである。この動きは、病院と近代医療の急速な発達と交差し、19世紀の終わりまでには、貧困層のためのものだった病院が中産階級を対象とするようになり、看護技術はここに市場を獲得した。しかし、神に仕える看護師という疑いようのない遺産である職業的な基盤は、20世紀の看護師が果たすべき課題を複雑なままにしている（Nelson, 2001, p.163）。

宗教を脱色しながら倫理的な側面を前景化して「看護する対象」を拡大させ、近代社会のなかでステータスを獲得した反面、看護を支えていた神が介在する余地のない状況を作りあげてしまったということである。この「神」は「神の名を誤用」した僧侶のそれでもあっただろうが、それと同時に、支配者が人々を押さえつけるために都合よく利用した神とは異なるアニミズム的な要素を持つ「自然＝神」を指すことは『看護覚え書』に示されている通りである。看護とは何かを定義しようとして書かれたヴァージニア・ヘンダーソン（2017）は「フローレンス・ナイチンゲールは、看護師は“自然”が患者を癒やすのと同じように、患

者を最善の状態に置くと考えた。医師も看護師も人々を癒やしはしない、と彼女は言う（21頁）」と述べ、ナイチンゲールが自然という神を秩序の最上位においていたことを示している。

ナイチンゲールは、ニーチェの唱えるキリスト教の役割をもとにクリミア戦争へと向かい、その後、道徳的な側面に光を当てることで看護を社会的に必要とされる存在へと引き上げ、そして、普遍的なアニミズムにまで通じる考え方を生涯にわたって手放すことなく看護を豊かなものにしたことがわかる。

3. ナイチンゲールとワトソンによる看護

近代医学が対症療法によって患者を当面の苦痛から確率論的に解放しようとするのに対して、看護師はすべての人を対象にバランスのとれた環境を整えることで神の御業に身を委ねる。ナイチンゲールが「nature」「Nature」「God」を互換的に使用しているように、自然は私たちと私たちを取り巻いている環境のすべてであり、人知の及ばない秩序のことであった。

看護の近代化とはそのような側面を捨象して近代医学のシステムに組み込まれ、看護が有している属性が可視化されずにいる状態のことである。自然に反して病気になってしまった人を癒やすのはまさに自然であり、病気は患者が神（自然）に対して負債を返す過程（reparative process<賠償過程>。一般的には「回復過程」と訳されている）なのである。

医師が産業革命を経て近代の発展とともに社会のなかでステータスを獲得するにつれて、看護は医学の一部に吸収されざるを得なくなった。神の思し召しに従って行動に移すことができた恵まれた看護師は、近代医学のなかで宗教が矮小化された時代に、何をモチベーションにして過酷な仕事に取り組んでいるのだろうか。

現代の近代的で透明化された看護は、前近代的でスピリチュアルな看護から「よい看護」へと「進化」したのだと思ひ込むことによって、矛盾を解消しようとしているのではないかとネルソンは指摘している。

修道女の共同体の重要性について、これまで深く詳

細に探求されてこなかった。そのため、宗教に生きた女性の達成と役割は過小評価され、信仰から世俗へと「自然に」進化したのだということになってしまっている (Nelson, 2001, p.163)。

自然や神を忘却してしまった近代人は、その欠如に嘆くどころか不要なものとして進化を迎え入れた。しかし一方で、近代社会が成熟し、医療や看護の分野に限らず「合理的な精神」だけでは解決できないことが表面化するにつれて、看護を支えてきたプレモダンな側面は徐々に再考されるようになっていく。信仰から世俗へは「自然に進化」したのではなく、むしろ産業と引き換えに変化したと考えられる。

ワトソンが「ポストモダン」という言葉を頻繁に使用する理由は、近代を相対化して客体化し、近代を乗り越えようとする目的のためである。その際に、ポストモダンはプレモダンと問題意識を共有してはいるが、近代をすでに体験した私たちは純粋な意味で、もはや前近代へと戻ることはできないと認識することは重要である。したがって、ワトソンはナイチンゲールの問題意識と接続させながらも、現代特有の状況を含ませつつ看護を捉え直そうとしている。

ここで、近代化とは欧米化のことでもあるから、プレモダンとポストモダンは必然的に欧米以外の各々の文化を見つめ直すことにつながる。この点に関して、マドレーン・レイニンガーは人類学の分野から民族看護学 (ethnonursing) を提唱し「イーミックなケア」という視点を取り入れている。看護が前近代と近代のはざまを参照してポストモダンを探る際に、おもに欧米の文化以外を対象とする人類学の知見は参照に値し、ワトソンにも影響を与えている。レイニンガーの言葉を引いてみよう。

民族看護学の方法は、看護現象を研究するために、論理実証主義の哲学的教義とその限界、一般に広まっている「科学的方法」の使用、そして、型にはまった量的パラダイムの特徴と目標を克服しようとして着想され、開発された (Leininger, 1991, p78). j

人類学はグローバリズムとは異なる個々の文化に焦

点を当てて、民族ごとの文化等を研究する学問であり、そこから、近代科学や量的方法を重視しないというスタンスに立っている。民族ごとの特徴を探求する学問であるから、当然そこには、文化の枠組みと分ちがたく結びついている各民族の死生観の差異も研究対象に含まれる。したがって、グローバリズムとは対極にあるワトソン看護論は、死生観を取り戻す思想でもあると言える。最新刊の『奇跡と神秘』(2019)には、エピグラフのように「私が述べようとしていることはただ、私たちの合理的な精神と近代科学は、死生観に対する答えをほとんど用意できていないということである (p.10)」と書かれている。

そう記したあとにワトソンは、本書のなかでさまざまな看護師が実際に体験した非合理で奇跡的な話を次々に紹介していく。近代社会を生きる私たちがそれらの体験談を理解しがたく、場合によっては不快に感じるのは、自然がもたらす大いなる秩序と比較してごく狭い範囲の概念枠組みのなかで思考を巡らせているからである。

さらに、目に見えないものやつねに動いているものをどのようにして掴まえて他者と共有できるか (言語化するか) というポストモダンな問いは、ワトソンを量子論やインド思想などの関心へと導いた。ワトソンがチャクラや経絡をはじめとした東洋思想にたどり着くまでに、マーサ・ロジャーズの「ユニタリ」やマーガレット・ニューマンの「意識の拡張」、あるいはレイニンガーの「ヒューマンケアリング」などの探求を経て、「人間とは何か」という問題意識のもとに幅広い分野を渉猟したことがうかがえる。彼女らはみな、身体を物質と捉えて要素に分解する近代的な方法を採用せず、固有の文化に包摂された身体のもつ総合的な存在の仕方を通して思索を深めてきた。ワトソンは次のように書いている。

人間性の霊的な面を組み込む東洋思想は、看護にほとんど影響を与えてこなかった。(中略)しかし、フローレンス・ナイチンゲールはすでに、自然が健康を回復し保持することを強調して、形而上学的な志向を示している (Watson, 2012, p.50)。

霊的な側面を表象するにおいてナイチンゲールは「看護の詩」というレトリックを使用した。ワトソンも同じように「詩」という表現方法とポストモダンの世界をリンクさせて考察している。ひとつひとつの事例の「何」というよりも「どのように」表現するかが問われているのである。ワトソンは次のように書いている。

感じられ生きられるもとしての経験のアーティキュレーションを行う際に、「詩」がもっている効果を達成する方法は、経験の諸事実や純粋な記述というものを超越するのである (Watson, 2012, p.104)。

4. 統合する場としての看護

詩と前近代的な非合理性、そして死生観は密接に結びついていることを見てきた。ワトソンやナイチンゲールがそこに着目する理由は、世俗と信仰、技術と霊性を本来的にあわせもつ看護は、対象を機械論的自然観の中でただ観察するだけでなく、「治癒」を目的とするところにある。看護は対象を静態的に観察するだけでなく、さらにその先の目的地を見ているのである。

「観察」や「傾聴」や「触れること」などの言葉は、ただそれを実行すれば解決するものではない。心身への探索とともに、どのように改善するべきかという段階をも必要とされる。それによる洞察は看護分野のなかに徐々に蓄積されることになった。マーガレット・サンデロウスキーが、機器の発達にともなう「触らない看護」の増大に危惧を抱く理由は、触ることがもたらす改善への寄与という目的関心が存在するからである。医師と看護師は「触れる」という行為から得られる効果の量と質において一線を画すとサンデロウスキーは考え、次のように述べている。

看護師は医療器具を通してではなく、主として自分の肉体を通して観察し続けた。観察器具を通して得られた知識が、肉体を通して得られた知識よりも客観的で科学的であると考えられるようになると、かつて看護の観察力の中にあるとされたパワーは弱まってしまった (Sandelowski, 2000, p95)。

近代医学の中で活用される機器とは異なるベクトルを持つ「看護本来のあり方」を彼女は指摘しており、つまり、西洋医学の主流を成すアロパシーとは異なる場所に看護は置かれるべきであって、そういった意味では看護はやはり、前近代あるいは反近代的な立ち位置にも立っていると捉えられる。

たとえば、ナイチンゲールが国家や他者に向かって説明するために利用した近代的な「統計」という手段は、数値が導く有意性を説得力のあるものとして理解する近代化した医学にあてはめた政治的な手段でもあっただろう。しかしその根底には、前(後)近代と近代のどちらかのみを選択するのではなく、柔軟な思考と幅広い視野を許容する姿勢があった。環境がいかなるものになろうとも、「詩」や「死生観」のような、人間として中心に据えるべきものを忘れなければ、私たちは「技術」や「スピリチュアル」における偏った考え方への執着から免れることができる。

ナイチンゲールと私は、人間的なもの、利他主義的なもの、霊的なもの、科学的なもの、実存主義的なものなどへの関心ばかりでなく、基本的なケアリングの実践、看護技術、そして「家庭での健康」(いまでは地域社会での健康)などへの関心も共有している。この考え方は、人と環境と自然の連携と、物質的なものと形而上的なものとの連携を認識し、復元することを探求するのである (Watson, 1999, p.263)。

ここに引用したワトソンの言葉は、ポストモダン看護を目の前にして「統合」を目指す私たちがもつべき考え方を端的に表現している。看護という分野において、時代的な区分や学問の区分などはやがて「統合」されていくとワトソンが考えていることが伝わってくる。最善の看護を目指すためには、いままで失ってきたものやこれから手に入れるものを統合して考察する時代が訪れつつあることを、彼女は示してくれているのである。

文 献

- ヘンダーソン ヴァージニア (2017). 湯槇ます・小玉香津子訳, 看護論——定義およびその実践, 研究, 教育との関連, 日本看護協会出版会, 東京.
- Leininger Madeleine (1991). Culture Care Diversity and Universality: A Theory of Nursing, National League for Nursing Press, New York.
- Nelson Sioban (2001). Say Little, Do Much: Nursing, Nuns, and Hospitals in the Nineteenth Century, U of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- ニューマン マーガレット (1995). 手島恵訳, 看護論——拡張する意識としての健康, 医学書院, 東京.
- ニーチェ フリードリッヒ (1994). 原佑訳, 偶像の黄昏 反キリスト者(ニーチェ全集14), 筑摩書房, 東京.
- ロジャーズ マーサ (1979). 樋口康子・中西睦子訳, ロジャーズ看護論, 医学書院, 東京.
- Sandelowski Margarete (2000). Devices & Desires: Gender, Technology, and American Nursing, Th U of North Carolina Press, Chapel Hill.
- Watson Jean (1999). Postmodern Nursing: and Beyond, Churchill Livingstone, Philadelphia.
- Watson Jean (2012). Human Caring Science: A Theory of Nursing, Jones & Bartlett Learning, Sudbury.
- Watson Jean (2019). Miracles and Mysteries: Witnessed by Nurses, Lotus Library, Boulder.

井村俊義
〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地
長野県看護大学
Tel: 0265-81-5139 Fax: 0265-81-5139
E-mail:f-imura@nagano-nurs.ac.jp
Toshiyoshi IMURA
NaganoPrefecture
Nagano College of Nursing
1694Akaho,Komagane,Nagano,399-4117JAPAN
TEL: +81-265-81-5139 FAX: +81-265-81-5139
E-mail:f-imura@nagano-nurs.ac.jp